

ほなひ歴史通信

第90号
2019. 3. 1

青い目の人形は何処へ

—慈愛と勇気で護られた文化遺産の在り方—

かつて、黒沢小学校に青い目の人形と呼ばれた一体の人形が残されていた。これについては、本誌創刊号（一九九六年十二月発行）及び『大子風土記』（天子遊史の会編集発行）に当時編集委員でもあった石井喜志夫先生が「青い目の人形」と題した一文を投稿している。これらによりまず青い目の人形の概略を述べておこう。

昭和二年（一九一七）当時、アメリカでは日本人移民排斥運動が起こっていた。それを心配した親日家の牧師シドニー・ルイス・ギューリック博士は、世界児童親善会を設立し、日本の子供たちに人形を贈り、日本とアメリカの親善を図ることを計画した。日本では日本国際児童親善会（渋沢栄一会長）や文部省が中心になって、受け入れ体制づくりが進められた。同年三月三日に明治神宮外苑の日本青年館に児童二千人が集まり、人形の歓迎会が盛大に催された。贈られた人形は、金髪の青い目をした人形で日米親善使節のメリーさんと呼ばれ、その数は一万二七二九体を数え、全国の小学校や幼稚園に寄贈された。茨城県内には二四三体が贈られ、その一つが黒沢小学校に残されたものである。日本からも、お礼のため五八体の日本人形（市松人形）がアメリカへ贈られた。青い目の人形は、その後太平洋戦争中に敵国アメリカの人形だという理由で焼かれたり壊されたりして、今では全国でも二七〇

体ほど、茨城県内では七体の存在が確認されているだけだという。人形の多くが戦争によって失われてしまったのである。

黒沢小学校でも、当時勤めていた菊池博子先生は焼き捨てるように言われたが、この罪もないかわいい人形をどうしても焼き捨てることができず、誰にも内緒でこっそりと図書室の本棚の裏側に隠しておいたという。これについて菊池さんは、本誌第五〇号（二〇〇九年三月発行）に寄稿した一文の中で、「人形を助けることにしよう。人形を焼却したと報告をし、人目の付かないところに匿おうと図書戸棚の隅一番下へ本で囲いケースのまま隠しました。絶対に見つからないようにと思いを込めました。でも万一見つかったらどうしようと後ろ髪を引かれる思いでした」と回想している。

昭和十八年二月十九日付毎日新聞には、「青い目をした人形、憎い敵だ許さんぞー」という記事が掲載された。こうした風潮が広がる中で、人形をどうしても焼き捨てることができなかつた。人形を助けようと人目の付かないところに隠し、見つからないようにと思いを込める。それは、人形に対する慈しむ心と勇気があつたからこそであろう。

さて、こうして保護されてきた人形は、現在茨城県立歴史館に保管されている。どのような経緯で歴史館に保管されることになったのかは分からないが、しかし、果たして本当にそれで良いのだろうか。確かに歴史館に収納されれば、散逸の恐れがなく極めて安全である。だが、「日本の子供たちに人形を贈り日米の親善を図る」という、ギューリック博士が青い目の人形に込めた意志は現在においてもなお尊く、大事にすべきものと思われる。そうした意味から言うと、人形は安全を確保しつつ、できるだけ地元で保管する形にすべきではないだろうか。さらに付け加えるならば、そうした文化財を保管するための歴史館あるいは資料館が大子町にも必要だろうということである。

（井上和司）

トンネルを抜けると保内郷

—久慈川・南郷道・水郡線・心ある人々—

柳下征史

木造校舎が目に入るたびに子供の頃を想い出してならない。羽織袴姿で女先生の声高な「ふるさと」の歌を大子小学校で見て聞いた時のびっくりしたこと、大子中学校で行われた卓球の保内郷大会、そこでの生瀬中学校との試合。そして廃校になってしまったわが母校西野内小学校・諸富野中学校での出来事、小学生の時に複式学級の学年があり、六年生がオルガンを低学年の教室へ持って行ったこと、お昼は各人の家へ食べに帰ったこと等々。いずれも六五年も過ぎた、昭和の大合併の少し前のことである。水郡線で大子町へ行けるというだけですごく嬉しく、ずうーとトンネル通過を、鉄橋を、久慈川を、駅のホームを眺めていたのを覚えている。

社会人になり、通勤の足はほぼ水郡線のみ時代。それ故に朝晩一時間に一本の便は、いろいろな職業の垣根を越えた仲間をつくるには便利で、みなが水郡線の目的駅に集合し、男体山、袋田の滝、矢祭山など保内郷の四季を楽しんだ。とくに冬の休日には、満員の車内から上小川駅のホームに溢れ出た若者がそのまま貝沼の野外スケート場へと列をつくり、早く申し込まないとスケート靴が借りられなくなると先を急ぐのであった。

サラリーマンであった私は、休日を待ちかねて動くしかない。家から近く、水郡線という足があり、愛用のカメラによる撮影は自ずから保内郷が中心となった。明治生まれの父との生活が長く、折々保内郷の話が聞かされた。正月明けには、「小寒の氷大寒に解ける」、大雨時には「久慈川一二時間那珂川二四時間」、久慈川の筏下りで悪さをした話、金山の鉦夫の話、諸沢の中島藤右衛

門の話等々。その影響もあり、コンニャク輪切連干し、楮・西ノ内和紙、お近津様の中田植、町付のキジ養殖、炭焼き、凍みコンニャク作り、鮎釣りなど、自然とレンズは人々の暮らしそのものに向いていった。

三五歳で独立し、好きな被写体を追うことができると思いきや職業としての撮影に追われ、自分の時間を持ってなくなってしまう。平成の時代に入ると、何かを記録者として残しておきたいとの思いから、茅葺き民家のある風景を深く追い始めた。その成果は、『ひだまりの茅葺き民家―茨城に見る日本の原風景―』として八溝文化社から発刊することができた。平成十九年のことである。県内の茅葺き民家の撮影に足繁く通う一方、何か疎遠になつていった保内郷だが、「茅葺き」を縁として木の文化塾と出会い、繋がることのできた。塾を通して分野の違う大子の人や町外の人、研究者等の仲間ができ、多様な情報や知識に深く接するなかで今まで自分が思い考えていたことを振り返り、より広い視点から動けるようになった。その流れのなかでこの拙文も書かせていただいているが、この繋がり糸をより太くしながらこれからも保内郷と関わっていきたいと思う。

平成三十一年正月十四日成人の日、何十年ぶりに水郡線の一番列車で「館トンネル」「鷲の巣トンネル」を抜けて大子へと向かった。「水戸を出てトンネルを一つ抜ける毎にシャツ一枚違う」と父に聞いていた、そんな古くからの話を気動車で味わうべく早朝マイナス五度の我が家から山方宿駅へ。だが、トンネルを抜けて景観は変われど、車内は暖房で心地よばかりだった。保内郷（下小川）に入り、西金・上小川・袋田・大子・下野宮と必ず駅の間に鉄橋があることと、二つのトンネル名を知ることができたのが、せめてもの水郡線を愛する者としての発見だった。

「大子は保内郷のオアシスで日本人の心の郷が保内郷である」。

昭和39年(1964)
貝沼スケート場 →



半世紀の間折にふれて人々と話し、深く大子を、自然を愛する一人として！
(常陸大宮市在住)



昭和41年(1966)
←コンニャク連干し
(下野宮)

昭和41年(1966)
↓茶摘み(左貫)



昭和43年(1968)
←氷結した袋田の滝

都市交流に携わって三〇年

齋藤庄一

私が都市交流に携わったのは平成二年（一九九〇）九月、香川県小豆島で開催されていた「日本一のかぼちゃコンテスト」を視察したことがきっかけだったような気がします。その年大阪で開催されていた「大阪市花博覧会」の見学を兼ねて友人と三名で大子を出発し、小豆島まで足を延ばしました。小豆島のコンテスト会場に着くと、全国から集まった二〇〇キロを超す巨大なかぼちゃが並び、その大きさには驚きました。

帰ってから早速、大子でも栽培してはどうかと仲間呼びかけるところ話がトントン拍子に進み、仲間が栽培したカボチャを翌年の秋に開催された町の産業祭（現在の太子祭りの前身）に展示しましたら大きな話題になり、平成四年九月二十三日に第一回太子町お化けカボチャコンクールを開催することになりました。年々栽培技術が向上し、小豆島の全国大会に太子町の重量ナンバーワンを出品するまでに発展しました。太子町のコンクールは第二〇回まで続きました。長期にわたり開催できたことは仲間や太子町、カボチャを栽培出品して下さった地域の皆様のご理解とご協力のお蔭です。実行委員長を一三年間務めることができ、多くの人と交流を持てたことは私の大きな宝物です。

昨年で二一年交流が続いている東京都世田谷区も、カボチャが取り持つ縁です。小豆島のかぼちゃコンテストを始めた大嶺さんに、昨年八月の世田谷区民祭りでお会いし、一年ぶりの旧交を温めてきたばかりです。小豆島のコンテストは今も続いており、昨年の記録は四一六キロだそうです。太子町の大会が終了したのは少し寂しく、残念に思われます。

トトロ、ウルトラマン、世田谷おやじの会、世田谷ボロ市、デ

イズニーオフィシャルホテルなどとの出会いは、全てカボチャが取り持った縁だと思っています。

現在、取り組んでいる教育旅行（小中学生対象の田舎暮らし体験）の受け入れも、これまでの交流活動の延長線のような気がします。東日本震災の年の教育旅行の予約はほとんどキャンセルになってしまいましたが、唯一継続して頂いたのが水戸市のリリーベール小学校でした。昨年で八年間続いているリリーベール小学校との関係は大事にしたいと思えますし、受け入れ家庭の皆さんも特別の思い入れがあるようです。

太子町の教育旅行の受け入れは、リリーベール小学校の他、茨城県南の中学校や東京都内の中学校を中心に年間二〜三校となっています。高齢化の甚だしい太子町なので、年々受け入れ家庭の減少が進み学校側の希望に因應するのが難しい状況です。皆様のご協力を頂ければ大いに助かります。教育旅行の受け入れ活動は、成果が出るまでには時間を要します。しかし、田舎暮らしを体験した子供たちが、将来は太子町の有力なサポーターになってくれることに間違いのないでしょう。また、その時を楽しみに少しでも長く頑張りたいと思っています。

常々私が思うことは、人と人との交流は三六五日、二四時間の対応が必要です。また多くを期待するものでもないし、勿論、対価を求めるものでもありません。いろいろな人との交流は自分の視野を広げ、人間味を深める手助けになると思います。私も古希を過ぎ、友人も欠け始めましたが、まだまだ気持ちは青年です。太子町は黄金郷なのです。全国、いや世界に誇る産物が沢山あります。漆、楮、奥久慈しゃも、米、常陸秋そば、八溝の杉等々、羨ましい地域に住んでいるのです。町の外に出ると太子の良さが分かります。この良さも、交流を通じて知ることができました。

（太子町在住）

教員かけ出しの頃の思い出(上)

—最初の赴任地依上中学校での日々—

高根信和

昭和三十六年四月一日、当時常陸太田市東二町、成田山真福寺の崖の下、板谷坂の角にあった茨城県太田教育事務所で、「茨城県久慈郡大子町立学校教諭(茨城県大子町立依上中学校勤務) 二等級に採用する。四等級を給する」旨の人事発令通知書を受け取った。その足で国鉄太田線常陸太田駅から気動車(ジーゼルカー)に乗り、上菅谷駅で水郡線に乗り換えて常陸大子駅で下車した。

駅前から出る国鉄バス烏山行は発車までまだ時間があったため、駅前の食堂で昼食をとることにした。食堂のおばさんに、「今から依上中学校へ行きたいのだがどのバス停で降りたらよいか」と尋ねたら、そばで酒を飲んでたおじさんが話に加わり、「今度娘が世話になる学校の先生か。今車を持ってくるから店の前で待つように」と言って店を出ていった。間もなく、日本通運大子支店と書かれたオート三輪車で、国道四六一号線を久慈川の支流押川に沿って西方へ走るようになった。三輪車の助手席から眺める風景は、山と川が織りなす故郷の原風景そのものであった。

塚田三郎教頭が玄関で迎えてくれた。新採教員を受け入れる目はそれは優しく、日通のおじさんとともに生涯忘れることのできない感動を覚えた。簡単な事務手続きを済ませた後、教頭から、「本校は社会の免許をもった教員が多いので数学か理科を担当してほしい」と言われた。どちらも不得意科目であったが理科と決め、理科の教員として在籍した三年間教えることになった。

学校の宿直室で一週間ほど生活した後、下宿先は下金沢の吉江通氏宅にようやく決まった。吉江家は代々教員の下宿先に使われていた農家で、一〇畳二間、家賃一ヶ月五百円で借りるこ

とになった。吉江家は、おばあさん、吉江夫妻、四人の子供といった家族構成で、田畑を経営するほかりんごを栽培したり十数頭の乳牛を飼っていた。毎朝、牛乳をホンダの耕耘機で出荷していた。牛は家族同様に扱われ、とくに出産時には一晩中家族で見守っていた。また、風呂が土間にあり、風呂に入っていると隣の牛舎から牛が顔を出し、面喰らった。よく子ども達も一緒に風呂に入ってきた。五右衛門風呂は慣れないので、釜の中に入っているように落ち着かなかったが、たまたまの牛乳風呂は身体が温まり、気持ちよかった。下宿先が酪農家であったからこそ味わえる貴重な体験であった。

日常生活の一端を記すと、台所がないので廊下の隅にりんご箱を置き、その上で調理した。冬は寒いので枕元に石油コンロを置き飯を炊いたが、炊飯中の湯が顔にかかり、やけどをする始末。時間がない時は鍋を持って出勤し、校舎の台所で食べているのを校長に見つかり、小言を言われたこともあった。食材の調達には苦労した。近くでガソリンスタンドを経営していた笠井商店は、当時まだあまり普及していなかった電気冷蔵庫を持っていて肉や魚を貯蔵していたので、それを分けてもらった。

自炊も初めての経験で、しかも社会科教師として希望や理想をもって赴任したにもかかわらず不得意教科を担当させられて自信なく、二二歳の若年教師の始まりは不安な毎日であった。そんな日々のなかでささやかな楽しみと幸せと言えば、弟のような元氣一杯で健気な生徒たちが、夜昼となく下宿に遊びにきて先生！先生！と慕ってくれたこと、そして豊かな自然に恵まれた大子の里で教師としての人生のスタートができたことである。

現在、最初の教え子たちは毎年三〇人位集まって旅行に出かけるが、半世紀以上たった今でもいつも私を誘ってくれる。また、お世話になった吉江家には今も時々訪問し、九〇過ぎた吉江夫人与昔話に花を咲かせている。

(水戸市在住)

江戸の詩人大窪詩仏 余録

島崎和夫

本誌第八七号の「江戸の詩人大窪詩仏(三)」で、詩仏が故郷に残したものの一つとして、池田村の桜岡元(立正)の寿蔵碑(生前に建立した墓碑)をあげましたが、表現が正確ではありませんでした。寿蔵碑の題額「豫齋」(草書)が詩仏の筆になります。豫齋は立元の号で、詩仏の異父弟です。

江戸時代後期、売れっ子詩人だった詩仏は、水戸藩領だけでなく、国内に三〇をこえる石碑・扁額・幟に書跡を残していることがわかっていきます。詩仏は書家としても知られていたのです。

それらの石碑のうちから四つ、東京都内でも交通の便利なところにあるものを紹介します。時間があつたら立ちよって、詩仏のさまざまな書体を楽しんでください。

虫塚碑 文政四年(一八二二)

台東区上野桜木一丁目一四番一号 寛永寺境内

上野駅の公園口から北へ公園内を横切つて一五分。寛永寺根本中堂の前庭にあります。伊勢国長島藩主増山雪齋が蝶や蟬、トンボなどを描いたさいに殺生した虫を供養するために建立したものです。「蟲冢」の題額(隸書)と儒者葛西因是の撰文の書(楷書)、碑陰にある詩の三つが詩仏の作品です。東京都指定文化財。

香月亭舊蹟碑記 文化四年(一八〇七)二月

台東区池之端一丁目三番四五号 旧岩崎邸庭園内

上野駅から南西に不忍池の淵を歩いて二〇分。湯島天神の北側にあります。一五世紀半ばに江戸城を築いた太田道灌が城の北方に小さな屋敷、香月亭をもうけました。その建設経過を述べたもので、碑の題額「香月亭舊蹟碑記」(篆書)と越後高田藩主榊原政令の撰文に書(楷書)が詩仏です。碑は庭園の東の林のなかにあります。

この碑が建立された当時は榊原家の屋敷でしたが、明治二十九年(一八九六)に岩崎彌太郎の長男で三菱第三代社長の久彌の本邸が建てられました。木造二階建・地下室付きの洋館は、鹿鳴館の建築家として知られるイギリス人ジョサイア・コンドルの設計で、近代の日本住宅を代表する西洋木造建築です。建屋と庭園を構成する碑もふくめて、旧岩崎邸庭園として国の重要文化財に指定されています。

画竹碑 文政五年(一八二二)

墨田区東向島三丁目一八番三号 向島百花園内

浅草から東武スカイツリーラインに乗り、東向島駅で下車、西へ歩いて七分のところにあります。百花園は文化・文政期(一八〇四〜三〇年)に造られた民営の花園。この中央に画竹碑が建っています。竹の図を大窪詩佛、岩を鏑木雲譚が描き、碑陰には儒者で友人の朝川善庵が「詩佛老人碑竹記」を書いていきます。これも国の重要文化財。なお園内への入口にある庭門の柱には左右に「春夏秋冬花不断」「東西南北客争来」と書かれた木板(対聯)が掲げられていて、来園者を迎えます。これも詩仏の詩と書です。

墨田三絶碑 文政五年(一八二二)

墨田区東向島三丁目五番二号 白鬚神社境内

百花園から西に歩いて三分、隅田川の堤のかたわらに白鬚神社があります。この碑は詩仏の弟子の佐羽淡齋(桐生の商人)が隅田川を詠じたもので、書(草書)が詩仏です。この碑は墨田区の登録文化財となっています。

白鬚神社から北へ歩いて一五分の三囲神社(墨田区向島二丁目)に建つ「本松齋一得翁之碑」の隸書、白鬚神社から南へ歩いて一五分の隅田川神社(墨田区堤通二丁目)にある「無琴道人墓銘」の楷書とあわせて「詩仏三碑」とされています。

参考文献 嘉津山清編『大窪詩佛関係石造物一覽』

(日立市在住)

小生瀬宝泉寺の扉に見る大子の中世(二)

藤井達也

前号に引き続き、小生瀬宝泉寺の扉に記された、永正七年(一五二〇)、大永六年(一五二六)の二つの墨書を読み解いていきたいと思ひます。

【永正七年部分】

〔原文〕

さてもく、こつな忘かた(難)く候、かくらい(加倉井)日向守、年ころにはなれてあるにもあらぬたう(当)御陣へ出ものゝふ(武士)の苦勞の時分、ならいとてかゝるたう(羅道)におもむきしおり(折)に

〔現代語訳〕

さてもさても、こんな忘れがたいことでございます。加倉井日向守が、十分には慣れていない状態で当戦陣へ出るという武士の苦勞の時分に、武士の習いであるところな修羅の道に赴いた折に。

上那須出兵に従軍した加倉井日向守は、まだ戦争経験も浅い若年の武士であつたようです。若い青年までも巻き込んでしまう戦争の苦しみを、「ものゝふ(武士)の苦勞」、「らたう(羅道)」と表現しています。戦場に赴くことは、武士の「ならい」とは言え、つらく苦しいものであると感じる、当時の武士の心情が吐露されています。

続いて、大永六年(一五二六)に書きつけられた墨書を見ていきます。

【大永六年部分】

〔原文〕

二たひ八見しとおも(思)ひし山里を

又きてたの(頼)むえと(江戸)の河内め

藤原朝臣通賢(花押)

源朝臣通守(花押)

同 弥九郎

重右門(花押)

同 弥三郎

重次(花押)

同 新五郎

重常(花押)

ひのへ
いぬ 大永六年六月廿六日 外岡源五郎源朝臣重朝(花押)

〔現代語訳〕

二度は見るまいと思つた山里を再び訪れて、前回同様神仏に無事であるようにと頼んでいる江戸の河内であるよ(人名以下は省略)。

永正七年(一五二〇)の墨書から十六年後の大永六年(一五二六)の年次とともに、藤原通賢等の名前と一篇の和歌が書きつけられています。二度は来ないだろうと思つていた山里という表現から、ここで名前が見える通賢は、前の永正七年の宝泉寺着陣の際に、出陣していたと考えてよいでしょう。永正七年以降も、佐竹氏や岩城氏を中心に、何度も上那須に出兵しています。大永六年にも上那須出兵が行われていたのかは定かではありませんが、少なくとも小生瀬に着陣するような戦争が発生し、通賢や外岡氏が動員される事態となつていたのです。その際、通賢は自分が記した昔の墨書を見つけ、懐かしい気持ちに浸りつつ、和歌を書き付けたのです。通賢は、荒々しい戦場に赴く間にも、和歌で自分の思いを表現する風流な武士であつたようです。(続く)

(水戸市在住)

和田昭為の出自と和田氏継承について

千葉篤志

佐竹氏本宗家の家臣である和田昭為(二五三〇一六一八)は、佐竹義昭・義重・義宣の三代に渡って仕えた佐竹氏の重臣です。昭為の実名は佐竹義昭からの偏諱で、義昭と昭為は生年が同じです。当時の史料を見ると、義昭の代から佐竹氏家臣団の中でも政治的に高い位置にいて、佐竹氏の領国支配や外交に渡って幅広く携わっていたことが確認できます。これらのことから、昭為が早い時期から佐竹氏の宿老であったことが考えられます。元龜二年(一五七二)に佐竹氏から離反しますが、天正二年(一五七四)正月に佐竹氏に帰参しました。天正十七年に義宣が家督を継ぐと、再び宿老に復帰し、豊臣政権期には、義宣のもとで、主に佐竹氏領国の内政面で活躍します。

このように、佐竹氏家臣団の重臣であった和田昭為ですが、実父は石井豊前守為忠という常陸国依上保の在地領主の一族でした。石井氏は、佐竹義昭の前の義舜・義篤の代に、白河結城氏の領国であった依上保へ進出した時に、佐竹氏に従属しました。一方、昭為の養父である和田大隅守為秀は、佐竹氏の譜代家臣でした。和田氏は、鎌倉時代から佐竹氏に臣従したとされる常陸国久慈東郡の国人領主でした。古河公方足利政氏から直接に書状を与えられていることなどから、佐竹氏家臣団でも格の高い家柄であったと考えられます。石井氏出身の昭為が和田氏へ養子入りした背景には、佐竹氏が白河結城氏領の依上保に進出する中で、その在地勢力である石井氏を従属させ、その一族に佐竹氏家臣の中で、伝統ある家を相続させることによって、佐竹氏当主による新たな直臣団の形成を図ったことが考えられます。つまり、昭為が継いだ和田氏は、佐竹氏当主によって改めて取り立てられた家である

とも言えます。

常陸国と和田氏の関係については、源頼朝の御家人で鎌倉幕府の初代侍所別当に就任した和田義盛の存在が挙げられます。義盛は、平姓三浦氏の一族で、建保元年(二二二三)五月に和田合戦(和田義盛の乱)を起こして戦死しますが、死後に没収された義盛の領地の一つに、常陸国佐都郡がありました。現在の常陸太田市にある和田の地名も、義盛の所領があったことに由来すると言われています。また、義盛の甥である胤長は、昭為が継承した和田氏祖先と言われています。胤長は、和田氏一族の中でも弓の名手とされ、常陸国塩籠荘(茨城県東茨城郡城里町)を所領としていました。

建保元年二月に源実朝を廃そうとした容疑で捕えられ、陸奥国岩瀬郡鏡田(福島県岩瀬郡鏡石町)へ配流となり、和田合戦の後にその地で誅殺されました。昭為は義重の代に掃部助から安房守に通称を変えますが、安房守を選んだ理由として、和田義盛が源頼朝に安房の所領を安堵され、さらに侍所別当に任じられた「吾妻鏡」の記事が関係していると推測されます。おそらく、当主の代替りに際して、佐竹氏当主との関係を再確認するために、「吾妻鏡」の記事から、頼朝⇨義重、義盛⇨昭為と想起させるために、安房守を選んだのではないのでしょうか。

昭為のように、家臣に領国内の伝統的な家の名字を名乗らせた、あるいはその家を相続させることは、他の戦国大名でも見られる事例です。例えば、武田信玄の近習であった真田昌幸は、信濃の国人領主の真田幸綱の三男で、真田氏が武田氏に従属した時に人質となりましたが、信玄は甲斐の名族である武藤氏を相続させ、昌幸は武藤喜兵衛と名乗っていました。戦国大名の権力編成において、伝統的な家を相続あるいは復活させる「家の創出・保護」は、当主を支える家臣団を維持する方法であり、引いては大規模な名権力による領域支配の正当性にもつながっているとと言えます。

(松戸市在住)

現代に姿を現した古道―「依上道」と「南郷道」―

藍原 怜

平成二十九年度的那珂市下大賀での発掘調査で、「依上道」・「南郷道」の可能性がある道路跡が発見され、大きな話題となりました。「南郷道」は、近世において水戸と棚倉あたりまでを結ぶ道路として整備され、大名の通行こそありませんでしたが、年貢や特産物など様々な物資の流通が行われた、地域にとっては重要な道路であったことが近世の地誌などに記されています。さらに近年の研究では、「南郷道」の起源が中世の「依上道」に遡ることが明らかになってきています。

この「依上道」「南郷道」については、常陸大宮市歴史民俗資料館の企画展「水戸と奥州をつなぐもう一つの道 南郷道」および同展の図録で現在の地形図に復元を試みるなど、重要な成果が出されていますので、詳しくはそちらをご参照ください。その成果の中から「依上道」について少し触れておきますと、中世の「依上道」の成立が、瓜連の繁栄と同じく中世前期まで遡ること、南北朝期においては、奥大道(鎌倉街道中道)や東海道(鎌倉街道下道)に準ずる常陸国北部の幹線と認識されていたことが指摘されています(高橋修「中世の南郷道―「依上道」試論―」前記図録)。

このように、文献資料からは、「南郷道」の前身である中世の「依上道」の段階から重要な幹線として利用されていたことが分かっています。しかし、当時、実際にどのような道路だったのか、どのように使われていたのかということを確認するのは非常に難しいことでした。ところが、平成二十九年度、偶然にも「南郷道」の復元ルート上に開発予定があったり、県教育財団と那珂市管轄の二つの現場で発掘調査が行われました。発掘前は「少しでも道路の痕跡にかすれば面白い」と思っていたのが正直なところですが、

両現場とも復元ルートとほぼ重なるように道路跡が発見される、という結果に驚きを隠せませんでした。その後「依上道」「南郷道」の発見ということで、新聞等にも取り上げられたことは皆さんもご存じのことかと思えます。

さて、前置きが長くなりましたが、今回は主に那珂市管轄の現場での成果から、道路跡の姿を見てみようと思います。これまでの下大賀での発掘調査では、古墳く平安時代の竪穴建物跡が多数見つかっており、また、出土した「馬長」銘の墨書土器や竪穴建物跡の構造や規模などから、在地有力者や古代の駅伝制にかかわる集落が下大賀に存在した可能性が指摘されてきました。平成二十九年度の調査でも、過去の調査と同様の竪穴建物跡が多数、また複数の期間重複して見つかっています。このことから、古代の下大賀地区には大きな集落が形成され、多くの人々が暮らす土地だったことが分かっています。その集落跡の中を道路跡は通っています。確認できた道路跡の規模と構造は、ほぼ調査区全域の東西方向に一九〇メートル、その幅は最大六メートルあり、非常に硬く締まった硬化面を持ち、道路両脇には側溝を備えていました。道路のつくり方は「波板状凹凸面」工法であり、道路の両側に設けられた側溝は路面上の排水などの役割があったと思われる。「南郷道」と想定される面からは、轍跡も見つかっており、荷車などによる人々の往来の痕跡も見られます。道路は大きく分けて三度の改修が行われており、定期的に管理されていたと考えられるため、文献資料に見られるように、中世・近世においては人々にとって必要不可欠な道路だったのでしょう。

最後に、私が個人的に驚いたのは、これらの道路跡が見つかったのが現用道路の真下から、しかもほぼ重なるように見つかったということです。目的や移動手段は変わっても、この道が昔も今も変わらず人々の生活を支える大切な道路であり続けた、ということなのかと思います。

(那珂市歴史民俗資料館)

【史料紹介】「御用留」に見る下野宮村と他村の交通

武子裕美

茨城県立歴史館に「菊池家文書」という古文書群が所蔵されています。菊池家は、久慈郡下野宮村（現大子町）の庄屋を務めた家でした。今回は「菊池家文書」の中から、享保年間（一七一六～一七三〇）に作成された「御用留」（菊池家文書三九五）の中身を紐解いてみようと思います。

まず、菊池家があった下野宮村は久慈川上流にあり、東側は大野村に接していて、北は現在の福島県との県境に位置しています。天保十三年（一八四二）の検地では田畠一〇八町余、分米一四石余、新田田畠二町余、分米八石余。村の北寄り、久慈川西岸の波原に河岸跡・河岸守住居跡があり、「水府志料」には「久慈川筋運漕此処より初て通ず。これより水上は至て水浅く、尚又大石共多くして、舟更に通じがたし」とあります。また、やや上流には生瀬への坂道水掛坂と接続する舟渡しがありました。このことから、水運の要所であったことが分かります。

では実際に「御用留」を紐解いてみましょう。

太田筋へ出し申候荷物御町馬二而附儀申候節、枝川村・田彦村・額田村二而相押、決而通シ不申候而、御町馬持並商人共至極難儀仕候

享保十七年（一七三二）八月に、名主から水戸藩の町奉行所宛てに出された願書の写しです。

これによると、太田筋（棚倉から現・常陸太田を経て水戸に至る、棚倉街道。太田街道ともいう）へ出した荷物は、枝川村（現ひたちなか市枝川）・田彦村（現ひたちなか市田彦）・額田村（現那珂市額田）にて押

さえて、決して通さないようにとのことなので、馬持ちや商人が難儀している、と書かれています。つまり、下野宮から運んだ荷物は、以前は太田街道を経て、枝川に至っていたけれど、享保十七年時にはそれが差し押さえられていることが分かります。

御町馬之儀ハ江戸ハ勿論、宇都宮・笠間・下館・久下田・結城・古河・小山其外何方へ出し申し少しも無相違、相通シ申儀ニ存候所、太田筋へ出し申し荷物限り右三ヶ村二而相押申儀、至極難儀仕候、尤 御城下馬之儀、何方へ相通り申少しも相構不申、相通申候由、及願申、先年之通御町馬無滞太田筋へ相通り候様ニ仕度奉願上候

さらに続く文章には、江戸や内陸の周辺地域へは運んでよく、太田筋へ出す荷物の内、枝川・田彦・額田の村々にだけ押さえているので難儀だ、と言っています。そのため、村役人がこれまで通り、太田筋に荷物を運びたい、と願っています。

この地域の輸送ですが、下野宮河岸から久慈川の舟運を利用しています。下野宮の東側の大野村は太田街道で那珂川の枝川河岸に運ばれ、そこから城下の御蔵に納入されました。また、濁水で久慈川舟運が利用出来ない際は、山造（現大子町下津原）まで牛などで駄送されることもありました。

享保十七年という時期ですが、この地域では六月五日に洪水があったことが『大子町史 通史編 上巻』に書かれています。この度の流通路の変更も、おそらくこの洪水と無関係ではないでしょう。実際どのような理由で枝川へのルートが押さえられていたのか、この御用留だけでは分かりませんが、下野宮村の流通について、宇都宮などへ向かうルートと枝川方面へ向かうルートがあったことが、確認出来ます。

（茨城県立歴史館）

町堀と人の「まちなみ」を次世代へ

木村直幸

常陸大子駅のホームに降り立つと綺麗な山並みと押川の堤防、そして水田が目に入ってきて来ます。「この水田の水はどこから流れてくるのか？」という好奇心から、町堀と呼ばれる水路の存在を知りました。僅かな史料を片手に、現地を歩いて見えてきた「まちなみ」を紹介します。

『泉町町内会だより』の「町堀の現状平成十二年四月現在」という記事に、江戸中期の開田時に押川に木堰が造られ、大正十五年頃に町補助工事で岡本堰を改良、その後、昭和三十九年五月に町堀側溝清掃利用組合が発足、昭和四十一年二月に大子町長が水利権（目的：農業用水、防火用水、衛生用水）の申請を行ったとあります。また、明治三十二年五月十五日に大子区議会で議決された『江堰修築保存費用徴収議案』には、「大子区用水ハ、全区地内ニ江堰及溜池ノ設アリ、以テ水田ヲ灌漑シ、一方ニ於テハ、之ヲ市街ノ間ニ□通セシメ、防火上及其他ニ使用ヲナシ（以下略）」とあり、施設として、亀石堰、岡本堰、長岡堰、宇坪沢堰、谷津溜池が挙げられています。このことから、町堀は、農業用水確保のために建造された岡本堰を水源とし、町内の防火・衛生などの都市用水としての機能を兼ね備えたハイブリッドな用水であることが分かります。

ここで、「農業用水と都市用水の機能を兼ね備えた町堀はどのように造られたのか？」という疑問が生じました。残念ながら町堀や大子区用水に関する史料はなく、その詳細は分かりません。ですが、法務局の閉鎖公図（明治二十一年四月調製、製図者：益子弥平太）を取得して見ると、岡本堰で取水された用水は大きく分けて四系統の水路に分水し、このうち高位部（最も高い位置）を流れる一系

統が現在の町堀になっていることが分かります。また、泉町や栄町、瀬戸田の閉鎖公図に注目すると、「■宅地」と記載されている土地が多く見られることから、水田を宅地化して現在の市街地が形成されたことが分かります。これらのことから、町堀は、施設建造時から都市用水の機能を備えていたのではなく、水田を宅地化する過程で農業用水を転用し、都市用水としての機能を備えていったものと考えられます。おそらく、町堀が造られた頃の景観は、本町通りの北側や金町通りの北側に人家が並び、高位部の水路から南側、すなわち現在の本町通りの町堀から南側に水田が広がっており、その後、時代の経過とともに、市街地が南へ拡大していくなかで農業用水路が町堀として市街地に取り込まれ、都市用水の機能を備えていったのではないのでしょうか。

水田を潤っていた農業用水を、都市化に伴い防火・衛生の都市用水に転用する過程では、町堀を農業用水として利用する人と都市用水として利用したい人との合意形成が必要不可欠であり、合意形成に尽力した人々の苦労は大変なものであったと想像します。岡本堰で取水した用水は、現在でも水郡線と押川の堤防に挟まれた地域に残る水田で農業用水として使われており、町堀が市街化や道路整備によって暗渠（側溝）化されても、防火・衛生などの都市用水の機能をひっそりと地下に潜めて存在し続けています。このような用水をもって形成された「まちなみ」は、大子町で生活を営む人々が地域の発展を願い、その時代に抱いた想いを実現するために行動してきたからこそ築き上げられたものです。

「まちなみ」が時代に合致した形に変化し続けるとしても、先人達の想いや功績が歴史として「まちなみ」と共に次世代へ受け継がれることを切に願う次第です。

最後に、『ほない歴史通信』の第九〇号という節目に寄稿する機会を下さった各位に深く感謝申し上げます。

（常陸大宮市在住）

大子町役場庁舎の新築に寄せて

大金祐介

今からちょうど百年前の大正八年（一九一九）のことである。当時の大子町では、役場庁舎の新築を巡って激しい議論が交わされていた。

大子町役場は、明治二十五年（一八九二）に、大子尋常高等小学校に併設される形で後山に置かれた。しかし、大正期になると、役場庁舎に老朽化が見られるようになった。そのため、大正七年、町議会において役場庁舎の新築が提起された。当時、役場庁舎と敷地を同じくする小学校では、校舎や校庭等の学校設備の狭隘化が問題になっていたことから、新築に際しては役場庁舎を移転することに上がったが、議論を巻き起こしたのはどこに移転するかということであった。大子地区選



大子町役場旧庁舎（写真の左に写る建物）

出の町会議員は、市街地に移転することを主張した。一方、上岡、山田、浅川地区選出の町会議員は、町内四地区の公平を期して町の中央に役場庁舎を置くべきであるとして、谷津（現・愛宕町）の県道沿いに移転することを主張した。こうして、市街地移転派と谷津移転派に分かれて、役場庁舎の新築を巡る激しい議論が交わされたのである。その激しさは、大正八年四月十九日付「いはらき」新聞において、「大子役場問題」と

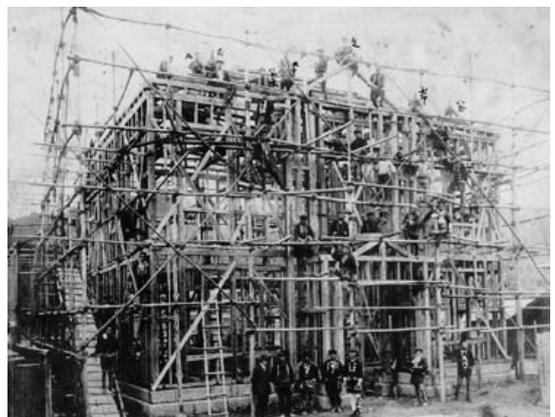
して取り上げられるほどであった。

激しい議論の経過は詳らかではないが、最終的には、市街地に移転することで決着した。そして、大正十一年から大子町役場庁舎新築事業が実施されることになった。役場庁舎の新築という大役を担ったのは、時の町長益子彦五郎であった。彼は、老齢七二歳を理由に十一年六月の任期満了をもって町長

を引退する考えであった。しかし、周囲から大子農学校の県立移管と大子町役場庁舎の新築が終わるまでは町長を続けてほしいと慰留されたため、前記二事業が終わるまでという条件付きで七期目を引き受けた。役場庁舎の新築は、彼にとって、七期二六年に及ぶ町長人生の集大成であった。

大正十一年三月十日、新庁舎の敷地として大子町大字大子字本町南側六七七番地の宅地百三十五坪が買収された。次いで、十二年八月、新築工事が着工を迎えた。新庁舎の設計は茨城県内務部土木課の田沼清太郎技手が担当し、施工は上岡の久保田万吉が請け負った。また、田沼技手配下の根本彦衛門が現場監督を務めた。同年十月十日に地鎮祭、同年十一月十六日に上棟式が挙行され、十三年六月に竣工を迎えた。

新庁舎は、木造二階建ての瓦葺きで、間口は六間五尺、奥行きは四間五尺、建坪は約二九坪、洋風の外観を持つ堂々たる庁舎であった。一階には町長室や事務室があり、二階には議場があった。近隣町村の役場庁舎と比較しても何ら遜色がないどころか、むしろ



大子町役場新庁舎・新築工事の様子

る立派であった。敷地内には、役場庁舎のほか倉庫などの付属施設も建てられた。要した費用は、用地費四八五〇円、役場庁舎建築費一万四八五一円二二銭、倉庫建築費一三九〇円、雑費二〇一〇円九五銭、合計二万三二〇二円一七銭であった。

大正十三年六月二十四日、新庁舎の開庁式が挙行された。開庁式には、県庁から堀田内務部長（知事代理）、田中英産業課長、齋藤豊喜産業技師、郡役所から野木延造郡長、石川幸次郎、新田実、皆川泰、大江宏一の四郡書記、三田寺朝壽郡視学が出席したほか、町長、役場吏員、官公署長、町会議員、区会議員、区長、区長代理者、学務委員、太子農学校長、小学校長、衛生組合長、消防組組頭、新築工事請負人、新聞記者、一般町民など、総勢五百五十名余りが出席した。開庁式の後、水戸地方専売局大子出張所を会場に祝宴が催された。さらに、三美亭を会場に二次会まで催された。全町を挙げての盛大な開庁式と祝宴であった。

大正十三年六月二十六日、旧庁舎から新庁舎への移転が完了し、新庁舎において事務の取り扱いが開始された。役場庁舎の新築という大役を果たした益子町長は、同年十月十日、町長を引退した。

その後、太子町は、昭和二年（一九二七）の鉄道開通を機に著しい発展を遂げた。その様子は、六年五月二十六日付「いはらき」新聞において、「太子町発展紹介号」として取り上げられた。記事には、太子町の発展を紹介する文章とともに、役場庁舎の写真が掲載されている。これを目にすると、立派な役場庁舎は、著しい発展を遂げる当時の太子町にはふさわしいように感じられる。当時の人々は、太子町が著しい発展を遂げることを見据えて、それにふさわしい立派な役場庁舎を建てたのだろうか。

今、太子町では、新しい役場庁舎が建てられようとしている。どのような役場庁舎が建てられるのか、私は一町民として非常に楽しみにしている。現在の太子町にふさわしい、広く町民に愛される役場庁舎が誕生することを切に願っている。（太子町在住）



太子町役場新庁舎 2階



太子町役場新庁舎 1階



太子町役場新庁舎

四三万人の大移動（上）

野内泰子

昭和十六年（一九四一）十二月八日未明、日本軍が真珠湾攻撃という暴挙に出た。実はその頃、これが日本軍による暴挙だなどと、一般の国民は誰も思っていなかった。日本は神の国だから、たとえアメリカのような大国が相手でも、きっと勝つと信じていたからである。初めのうちは、毎日のようにラジオで日本軍の快進撃が伝えられ、勝利を祝って度々提灯行列が行われ、まだ小学校中学年であった私も近所の人達といっしょに横須賀市の大通りを歩いた記憶がある。しかし、そんな勝ち戦さは長くは続かなかった。やがて勢いを盛り返した米軍に次々と南方の島々を奪回され、その度に大勢の兵士が犠牲になった。

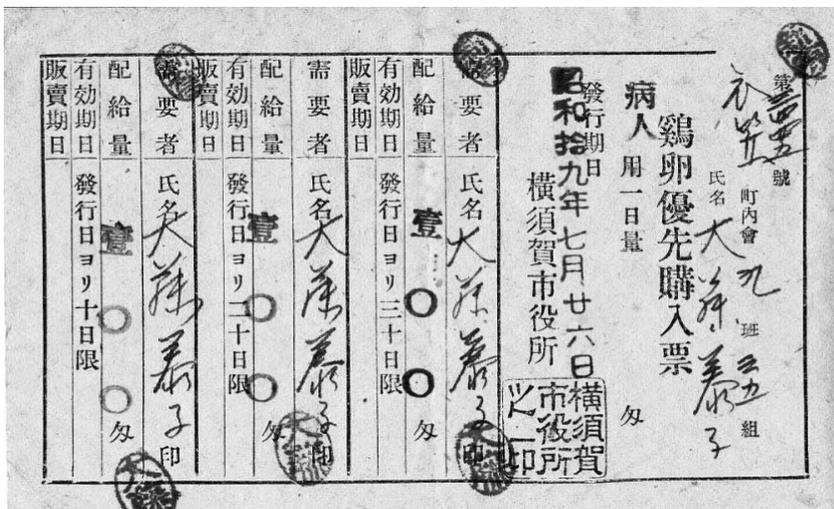
昭和十九年、太平洋戦争に突入してから足掛け四年になっていた。内地の生活も窮乏の一途を辿り、アルミ材不足で錫合金の十銭、五銭、一銭硬貨が製造されるようになった。鶏卵の最高価格が二、三割値上げとなったが、鶏卵は病人以外滅多に手に入らなかった。新聞にアカザなどの野草の食べ方が掲載されたりした。また、七歳未満の幼児に一日四二グラムの米の増配が決定された。四二グラムの米というのは、約カップ四分の一である。

政府は、幼稚園の休園を通達、疎開を奨励した。ここにきて、疎開という言葉が出るようになった。これは、サイパン島が陥落し陸上基地から日本本土への米軍の空襲が可能になったことから、政府はこれを受けて都会の国民学校初等科高学年の学童を、田舎に集団疎開させる方針に踏み切ったのである。これにより約四三万人が大移動させられた。

今年四月三十日に退位される今上天皇は当時国民学校の五年生であられたが、皇太子殿下として例外ではなく、同級生達と一緒に

日光へ疎開されることになった。内地の空爆が頻繁になると、日光も危険だとされ、更に奥地の山の方に移られることになった。私は当時、横須賀市衣笠国民学校の六年生であったが、六月半ばから病気のため入院生活を送り、退院しても引き続き学校を休んでいた。そのうちに夏休みとなり、その頃に六年生の父兄が学校に召集され集団疎開の実施についての説明を受け、参加できるかどうかについて一人一人の態度を確認されたらしい。集団疎開先は、丹沢の山の方のお寺であった。私は、病後で、とても山中での集団生活は無理ということで、父の実家の茨城県生瀬村へ縁故疎開をすることになった。

（大子町在住）



病人用鶏卵優先購入票
昭和19年7月発行（横須賀市）

産地づくりに向けた公的支援の展開（下の二）

―特産品・りんごのルーツを探る（一一）―

本誌八八号では、りんご栽培に対する大子町の支援策の一つとして講師を招いての講習会開催を挙げた。講習会は昭和三十五年、三十六年度、三十七年度にそれぞれ一回ずつ計三回行われたが、本稿では、各講習会の模様について補足しておきたい。

まず招いた講師は、昭和三十五年と三十七年度の場合が藤森要吉さん、三十六年度が宗像小治郎さんである。『福島県職員録』によると、二人ともこの当時は福島県園芸試験場に主任研究員として所属していた。ちなみに、同試験場はリンゴ、モモ、カキ、ナシ等の果樹及びそ菜の試験研究を行う部署として二十二年九月に福島市飯坂町に設置されたもので、例えば四十三年度には三一三〇ヘクタールのリンゴ栽培面積をもち、栽培、土壌肥料、利用加工、病害虫等に関する幅広い試験研究を実施していた（要覧）。ここに在籍した二人は、りんご栽培の現場をよく知る実務経験豊かな研究員であり、また知名度も高かったようである。

最初の講習会は昭和三十六年三月十日に開かれ、会場は大子町青年研修所である。三十四年秋に九〇本のりんごの苗木を植えたばかりで、りんごに関するあらゆる情報を意欲的に吸収していた木澤源一郎さんもその講習会に参加していた。木澤さんによると、会場は参加者でいっぱいになり、恐らく百名近かったのではないかという。藤森さんの講話について、木澤さんは次のように語っている。「藤森先生が、大子町はコンニャクとか葉煙草とかいろいろの特産品があつて恵まれている、こういう所でりんごをやつても成功しないからつて。りんごに期待してたのが冷まされちゃつて、がっかりしたんですよ。印象に残っているんです、それが」と。ただこれは講話の一齣であり、他方で、りんごの専門家として

栽培万般に関するノウハウを伝授したことは勿論である。現に、講話の内容はB5判のガリ版刷り『りんご栽培』というタイトルの小冊子（全四一頁）にまとめられ、同年十月に茨城県農林水産部から発行されている。その「まえがき」には、「本書は本年三月大子町において：果樹専門技術員藤森要吉先生を招き栽培講演会を開催いたし、その際の講演内容に更に筆を加えていただいたものを印刷したものである。／本県におけるりんご栽培は気温、降水量等に多少の難点があるので品種の選定、栽培法については慎重な検討を行い、あやまりのないよう願う次第である（後略）」と記されている。「りんご園の開設」、「品種」、「開花結実の問題」、「摘果」、「袋掛け」、「肥料及び土壌管理」、「着色」、「収穫上の注意」、「整枝剪定」、「病害虫防除」といった一〇項目から成るこの小冊子は、一種の教科書として栽培に取り組む生産者には大いに参考になり、役立ったのではないだろうか。

二回目の講習会は、大子町と茨城県農産園芸課の共催の形で昭和三十七年三月十五日、十六日の二日間開かれた。講師は、宗像小治郎さんに代わった。その模様は、「りんご栽培講習会 盛会裡におわる」の見出しで、同年四月一日付「広報だいが」に紹介されている。十五日は「県特産指導所で、幼木の剪定実習を実施したが雨の中傘をさして五十名が熱心に受講し、翌十六日は青年研修所で、四時間に及ぶ長い講義に真剣に聞きいつていた」と。この短い記事からも、参加者の意気込みが伝わってくるようである。この講習会にも参加した木澤さんは、昼間の講義にも増して、講師が宿泊する旅館での懇親会が有意義だったという。「剪定の講習会では、先生も二年先三年先を考えながら枝を切るのを、途中で質問すると気が散るからいやがる。疑問に思ったことを懇親会の時に出す。酒が入ったりするもんで、みんな度胸がついて先生に気軽に話しかけられるんですね。ざっくばらんに話ができ、いろいろ情報が入ってきました」と回顧している。（齋藤典生）

こんにやくの神様（六）

私の高祖父のコンニャク栽培研究（販売について）

何年もかけて、丹精込めて生産したコンニャクイモが年に一度やっと出荷できるわけだから、農家にとってできるだけ良い値で売れなければ、今までの苦労も水の泡である。コンニャク道具の調査で、道具を寄贈してくださった方へヒアリングを行った時にも、皆さんは口々に、価格が高いときを見計らって荒粉を売った、他の地域の値段の状況などを見たうえで、我慢できず売ってしまった後に値段が上がって悔しい思いをしたなど、当時の思い出を語ってくれた。

勝次は、「農家の生産は年一度であるから販売に関しても十分諸般の事情を研究して販売すべきである」需給の状況によつて価格の高低が生ずることが原則であり、精粉の需要期は十一月より二月迄の四ヶ月で此の期間の消費量は年間の約半量を消化し残半量が八ヶ月間に消化さるゝと聞く。此の消化状況を勘案すれば生産者は二月下旬頃迄に約六割を販売し其の後分割販売を行い平均価格売りをすることが大切である。単に根拠なくして高く売る考えは投機的であり高価になることは外産輸入を誘致することであると述べている。農家としてはできるだけ高い値段で販売したいところだが、その場だけでなく、地元の特産として生産の価値を高めたり、中国などからの安いコンニャクイモが輸入されて、国産のものが売れなくなってしまう危機感を感じ、販売についても、そういった情勢を見極めながら、農家も研究しなければならぬと訴えている。こういった文面から、勝次が自分の利益や趣味としてコンニャク栽培を研究していたのではなく、研究者としてのプライドを保ちながら、大子町の農業の将来を見据え、農家を指導する立場として、強い責任感を持っていたことが分かる。

私が文化財保護担当として「常陸大子のコンニャク栽培用具及び加工用具」の国登録有形民俗文化財登録を目指し、大子町におけるコンニャク栽培の歴史や道具を調査したことが縁となり、六回にわたって私の高祖父のコンニャク栽培研究の資料を紹介してきた。この調査が無ければ、私が高祖父の存在を意識することはなかっただろう。また、自分の先祖がコンニャク栽培の研究を熱心に行っていたことも分からなかっただろう。埋もれていた先祖の功績を町の歴史の一部として紹介することができ、このような機会をいただけたことに大変感謝している。（完）

参考文献 菊池勝次著『蒟蒻栽培の研究』（昭和二十九年五月発行）

（家田望）

編集後記

今回で九〇号を迎えた「ほない歴史通信」は、平成八年（一九九六）の創刊以来一度も休むことなく、二三年間にわたって大子町の歴史、文化に関わる情報を発信し続けてきました。これまで本誌にご寄稿いただいた皆様から感謝申し上げます。今号は平成最後の発行号になります。新たな時代になっても、大子町の歴史や文化を後世へ伝え続けるツールとして、皆様とともに大事に育てていきたいと思えます。（家田望）

編集 大子町歴史資料調査研究会

編集人 齋藤 典生（大子町歴史資料調査研究員）

井上 和司（大子町歴史資料調査研究員）

家田 望（大子町教育委員会事務局）

発行 大子町教育委員会

久慈郡大子町大字池田二六六九番地

大子町立中央公民館 ☎ 0295（72） 1148